

山岡元隣『宝蔵』箋註(六)：卷三(九)~(十五)

川平，敏文

<https://doi.org/10.15017/4742058>

出版情報：雅俗. 16, pp.103-115, 2017-07-20. 雅俗の会

バージョン：

権利関係：The pictures in this paper are hided because of copyright protection.



山岡元隣『宝蔵』箋註(六) — 卷三(九) — (十五)

川平 敏文

・底本・挿絵図版は国会図書館蔵本『宝蔵』（請求番号 午一5一65）による。

・翻字・注釈方針は『雅俗』第一号および一五号を参照されたい。

・本稿は、九州大学大学院における演習の成果を基としている。今回掲出分の礎稿作成者は以下の通り（数字は項目番号に対応）。

(九) 工藤いずみ (十) 明石麻里 (十一) 平山聖悟 (十二) 趙晶
(十三) 閻紹婕 (十四) 趙晶・明石麻里 (十五) 村上義明

これらの礎稿をもとに、川平が本文・注釈の全内容を、原資料にあたって確認・追補・修正した。諸賢の御教示を乞いたい。

(九) (一) 十露盤

算用は(二)六芸のひとつに出て、(三)乗除商実法の法有て、遠くは(四)天地の運行、日月の盈虚、山をこぼち江をうづめ、近くは田畠の広狭、金銀米穀の員数、ひとつとしてのせずといふ事なし。況や(五)往を聞て来れるをしるも、皆数の理にもる、といふ事なきをや。われ心見

にこれをいはん。(六)世に算をしらざる人もなく、またしりたる人もまれなり。何をか算しらざる人もなきといふ。愚なる人も二九の十八、三九廿七をよびて、(七)金を以て銭をかい、銭をあつめて金となせり。何をかしりたる人もなきといふ。もとより人の命に価なし。若人きたりて万貫目の銀をつみて命を買んといふに、たれか売人の有ぬべき。しからば(八)人生七十古来稀なる命。(九)一日のほど、いかほどの価にかあたれる。(十)わづかの利欲をむさばらん為に形をいたため心を苦しめ、老の来るをもしらず、命のちままるをもしらで、(十一)えたりとおもふは、(十二)小につきて大をわする、なり。これを算用をしりたりとやいはん、しらざるとやいはん。(十三)「月をもめでじ、これぞ此、つもれば人の老となるもの」とだにのみしもあるを。

(14) 算用はしらぬが花ぞ老の数

(15) 算盤極意尽乾坤
(16) 日月星辰行道存
(17) 六々元来三十六
出無穴矣入無門

【語釈】

(1) 十露盤

「十露盤（ソロバン） 算盤也」
（『分類節用集』。図版参照。）

(2) 六芸

『周礼』に出る六種の技芸、すなわち礼・楽・射・御・書・数。「数は算用の事なり」（『増補鉄槌』第二二段）。

(3) 乗除商実法

乗（掛け算、乗法）、除（割り算、除法）、商（ある数を他の数で割って得た値）、実（被乗数、被除数のこと）、法（乗法における乗数、また除法における除数）。

著作権保護のため図は非表示

(4) 天地の運行、日月の盈虚くひとつとしてのせずといふ事なし

「盈虚」は満ち欠け。やや類似する文章として、「妙なる哉、遠山のたかき、いたらずしてこゝにしり、海淵のふかさ、入らずして底をしる。いはんや天理をや。日月の行道、春秋の運氣、そのほか巫医百工のたぐひ、算数によつて吉凶をもとめ、血氣の順逆をしる」（『塵劫記』序）。

(5) 往を聞て来れるをしる

過去のことを聞いて、未来のことを知る。▼「いんじ」は「往にし」が変化したもの。

(6) 世に算をしらざる人もなく、またしりたる人もまれなり

「さん（算）は知らざる人もなく、よく知りたる人もなしと、古より申つたへたるは、まことなり」（『因帰算歌』序）。



『訓蒙図彙』巻八（勉誠出版）より

(7) 金を以て錢をかひ、錢をあつめて金となせり

金銀貨を錢に両替することを「錢を買う」と言った。「錢をかふには金銀を手ばなし、人をたのみてつかはしめれば、あしき銀にすりかへらる、事あり」（『東海道名所記』巻一）。

(8) 人生七十古来稀なる命

「酒債は尋常、行く処に有り。人生七十古来稀なり」（杜甫「曲江二首」、『杜律集解』巻上所収）。

(9) 一日のほど、いかほどの価にかあたれる

「一日の命、万金よりも重し。牛の価、鷲毛よりも軽し。万金を得て一錢を失はん人、損ありといふべからず、と言ふに」（『徒然草』第九三段）。

(10) わづかの利欲をむさぼらん為に小につきて大をわするゝなり

『徒然草』にはこれに類似した考えが複数みられる。「惑へる者はこれ（死）を恐れず。名利に溺れて先途の近き事を顧みねばなり。愚かなる人は、またこれを悲しふ。常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり」（第七四段、「愚かなる人、この（存命の）樂しびを忘れて、いたつがはしく外の樂しびを求め、この財を忘れて、危く他の財を貪るには、志、満つ事なし」（第九三段）など）。

(11) えたりとおもふは

利益を得たと思つてゐるのは。

(12) 小につきて大をわするゝ

目先の小事に氣を取られ、本当に大事なことを忘れてゐる。▼「小事ニカ、ハツテ大事ヲ忘ルナ」（寛政九年成『諺苑』）。

(13) 月をもめでじ、これぞ此、つもれば人の老となるもの

「大かたは月をも賞でじこれぞこの積れば人の老いとなるもの」（『古今集』雑歌上、業平朝臣）。

(14) 算用はしらぬが花ぞ老の数

算術は知らないほうが幸せだ。余命を計算してしまふから。▼「しらぬが

「花」は、「知らぬが仏」「見ぬが花」と同意。

(15) 算盤極意尽乾坤

算盤を使いこなせば、天地の間に存在するあらゆるものを計算し尽せる。

(16) 日月星辰行道存

日・月・星の運行も、この道具の内に存在していると言える。

(17) 六々元来三十六、出無穴矣入無門

文意未詳。算盤を使えば明確な数字がはじきだされ、曖昧なところがないという意か。

(十) 腰下物

(1) つぶの緒じめに(2) ばへのくわら、(3) 鮫印籠に嶋巾著は(4) 隠者のよきさげ物なり。ものまふでの(5) ぬさ、いるるによろし。(6) 道路の乞食にほどこすによろし。(7) 自のわづらひをいやせるによろし。人のやめるをすくふによろし。(8) 目薬をたくはへ焼物をたしなみて、ちいさきうちにそなへずといふ事なし。此(9) むくろじの幾年みがきてもしろまぬは、よきかたにふかくそめるか、あしきかたにふかくそめるか。また、ねつけのばへを見るに、そのたけ縄に二寸半ばかりにて、うちをのぞめる時はいとおくぶかし。万の器も、まがりてくらきものは其寸法よりふかく見え、すぐにして明なるものは其寸法よりあさくみゆ。これにてしりぬ、人の心ばへもたくみにしておくぶかく見ゆるは、(10) 譏佞のなせる所なるべし。(11) たゞすなほにあさくみゆるなん、ほとんど道にちかかるべし。(12) ねつけといへど、丸くてやすらかならんどこのましくて、つけかへ侍つ。

(13) 山の腰の月もや雲の帯ぐるま

クラセイハヤルサケモスレタリ
当世早流下物奇

ワレハタガフチヤウジヤハカナラズンセリトヲ
我疑長者必存力

メイシンチンセキカリトシアサヒノ
名珠珍石輝如曦
カネメイクバクコンニフラリ
金目幾腰不落離

【語釈】

(1) つぶの緒じめ

「つぶ」は無患子。「無患子(つぶ)……其の俗云無久呂之、今俗云豆布」(『和漢三才図会』卷八三)。「緒じめ」は巾着、印籠などの口を締めるための緒どめ。無患子の実は黒くて堅く、数珠などにも用いられた。「粒(ツブ)——数珠、緒じめ」(『類船集』)。なお、「粒の緒締に海麝の掛絡、琉球嶋の大巾着」(『是楽物語』卷上)とあるように、当時、注2の「ばへのくわら」とセットで慣用された言い方か。

(2) ばへのくわら

「ばへ」は、注1所引の『是楽物語』、および後文の「ねつけのばへを見るに」以下の記述から、「ばい」の訛りで巻貝。また「くわら(掛絡)」は煙草入れ、印籠などにつける根付け。

(3) 鮫印籠に嶋巾著

「鮫印籠」は、鮫皮を巻いて作った印籠。「嶋巾著」は縞模様の中着。腰に下げて銭や薬などを携行した。

(4) 隠者のよきさげ物

隠居にふさわしい下げ物である。▼「さげ物」は腰に下げて携帯する印籠、巾着、煙草入れなどの総称。「若そばかくふさしめば、さげ物・さいふ等に用心すべし」(『色道大鏡』卷一四「旅籠屋女篇」)。

(5) ぬさ

幣、幣帛。紙や木綿、麻などで作り、神前に捧げた。

(6) 道路の乞食にほどこすによろし

路傍の乞食に施すための小銭を携帯するのによい。

(7) 自のわづらひをくすくふによろし

持病を癒すための薬を携帯するのによい。また、(その薬で) 人が病気になるのを救うのにもよい。

(8) 目薬をたくはへ焼物をたしなみて

「目薬」は瞼に塗る膏薬。「治眼膏……右スリ合せ、乳ニテ練リ、眼上瞼ニ塗ル也」(宝永四年刊『眼目明鑑』巻四)。貝殻に入れて携行したか。「蛤貝——目薬」(『毛吹草』巻三)。「みる花や目薬人のさくら貝」(『崑山集』巻四)。「焼物」は種々の香を合わせて作った練香。やはり貝を容器とした。「譬ばくだり盃一つ、焼(たき)物一貝とりて、一角許とらせて酒などす、めければ」(『好色二代男』巻二一六)。

(9) むくろじの幾年みがきてもしろまぬ

「むくろじ(無患子)」は「つぶ」に同じ(注1参照)。「無患子は三年(百年)磨いても黒し」(生まれつきの性格はなかなか変わらない)という諺がある。「木楳は三年磨くに黒く、末世の苦行修し難しといへども」(正徳五年『それぞれ草』巻下)。

(10) 讒倭

事実を曲げたり偽ったりすること。

(11) たゞすなほにあさくみゆるなん、ほとんど道にちかかるべし

ただ正直で底が浅く見えるほうが、ほんとうに道に近いのである。▼「上善は水の若し。水善く万物を利して争はず。衆人の悪む所に処る。故に道に幾し」(『老子』易性)の思想・字句を踏まえる。

(12) ねつけといへど、くつけかへ待つ

根付けのような些少なものであっても、丸くて安寧であるほうが好ましく、付け替えることにしました。

(13) 山の腰の月もや雲の帯ぐるま

山の腰(中腹)あたりに雲が帯のようにかかり、その端に帯車のように月が出ているよ。▼「帯ぐるま」は根付けに同じ。「青苔、衣を帯びて巖の肩に掛かり、白雲、帯に似て山の腰を囲る」(謡曲『白楽天』)。「満月やさながら雲の帯車」(『毛吹草』巻六、正甫)、「かつらぎや雲の帯する山の腰」(同巻七)。

(14) 我疑長者必存力

私は金持ちが必ず徳行を積んだ人だということを疑う、の意か。

(15) 金目幾腰不落離

どれだけ高価なものか分からないほどのものを、腰にぶら下げている姿を見れば。▼「一、ぶらりといふこと葉は、高き所より落もはてずして半にあるやうの良歟。不落離と書よし云り」(慶安三年刊『かたこと』)。

(十一) (一) 目器

(2) 亡目の鏡、(3) 法師の櫛は、たからながらも宝ならざるは、その用ゆべからざるが為なり。(4) 此もの十年余以前までは、いづ方にか有つて。手にふれ、(5) 誠に目にもかけざりつるに、此ほどは、(6) よるのほかげなどに書を見るにも、(7) まだ、くやうにをぼるなるに、思ひ出でかけつれば、(8) 文字のあやめも一しほ明なるぞ、いと嬉敷。また心見にこれを論ぜん。(9) 眼力薄からずんば、此物宝とならじ。若此ものを珍とせば、いかなぞ眼力のうすき事をなげかむ。(10) 又、眼力のうすらげるをなげかば、めがねの珍たる事を悦ぶいはれあるべからず。(11) えがたきめがねをたうとみ、よりゆく年をわすれんよりは、しかし、明なる眼にめがねも共に忘れんには、めがねに老若の(12) 差別有。老眼によきは若き人にあはず。わかき目によきは老眼にあはず。もし

目がね必眼力をたすくといはゞ、老眼だに明にせるを、若きにかけば、いよ／＼明なる事をくはふべき道理也。されども老眼によろしきは若きによろしからざるは、物毎に其功能のさだまれる所あればなり。此故に(13)題目たうとしといへど、浄土宗の往生をたすけず。念仏すぐれたりといへ共、法華宗の臨終をすくはず。若此心をえば、よその富をもうらやむべからず。(14)わが樂をも借すべからず。又、(15)「月花はさのみ目にて見るものかは」といへば、あながち目がねをからずとも、心にも見るべくおもへど、猶書見るにぞ、(16)みづからの忘れもあれば、此ものなくては又いかゞ。(17)遠めがねはむつかしきものにこそ。

(18) 花と見ば雲に用ひじ遠めがね

(19) 目器益明勝二葉針

一生骨折為三何事

(20) 読書貧樂価千金

(21) 百二倍憂患一灯火陰

【語釈】

(1) 目器

「眼鏡(がんきやう) 俗云めがね」

〔訓蒙図彙〕卷六。図版参照。

(2) 亡目の鏡

意味のないこと。「亡目」は「盲目」と同意。

(3) 法師の櫛

「法師の櫛だくみ」〔毛吹草〕卷

二。不似合いなこと。

(同前) 著作権保護のため図は非表示

(4) 此もの十年余以前までは、いつ方にか有つる

永積洋子編『唐船輸出入品数量一覽』(創文社、一九八七年)によれば、承応三年に「鼻眼鏡」二〇〇個、寛文二年に「眼鏡」一六〇〇個、同三年に「鼻眼鏡」七〇〇個が輸入されている。

(5) 誠に目にもかけざりつるに

まことに文字どおり、目にかけることもなかったが。▼「目にかける」を、「見かける」と「眼鏡を目にかける」の両意にとつた洒落。

(6) よるのほかけ

夜の灯火の光。

(7) まだくく

濁点の位置は底本のまま。「撃(マダ、ク) 灯将二熄ントスル也」(『書言字考節用集』)。

(8) 文字のあやめも一しほ明なる

文字のかたちも、いつそうはつきり区別できる。

(9) 眼力薄からずんば、此物宝とならじ

視力が低くなければ、この道具は宝とはならないだろう。

(10) 又、眼力のうすらげるをくいはいはあるべからず

さらにまた視力が低くなることを嘆くならば、眼鏡を貴びいわれはなくなるだろう。▼視力が低下して度数が合わなくなれば、その眼鏡はなんの価値もなくなるということ。

(11) えがたきめがねをたつとみくらめがねも共に忘れんには

手に入れた眼鏡を尊み、その助けによつていく年齢を忘れるよりは、高い視力をたもつて、年齢や眼鏡の必要をともに忘れるに越したことはない。▼「欲を成して楽しびとせんよりは、しかじ、財なからんには」

〔徒然草〕第二七段に似た構文。

(12) 差別

「差別(シヤベツ)」(『合類本節用集』)。

(13) 題目たつとしといへど、法華宗の臨終をすくはず

「題目」は法華宗の「南無妙法蓮華經」、「念仏」は浄土(真)宗の「南無阿彌陀仏」。両宗は古来、教義問答を繰り返してきた。

(14) わが楽をも借すべからず

自分の楽しみも、人に貸すことはできない。▼老眼鏡が若者には合わないという文章に対応している。

(15) 月花はさのみ目にて見るものかは

「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは」(『徒然草』第一三七段)。

(16) みづからの忘れもあれば

自分の物忘れもあるから。▼眼鏡によって細かい文字が判読でき、理解が助けられる。

(17) 遠めがねはむつかしきものにこそ

遠眼鏡は風情がないものであるよ。▼「遠眼鏡 三重の筒を作り、伸縮して各口に玉を嵌む。其の本の玉は老眼鏡の如くし、中と末とは壯眼鏡の如くす。但し本朝作る所は三里以上を視ること能はず」(『和漢三才図会』卷二六)。

(18) 花と見まがう雲に用ひじ遠めがね

花と見まがう雲であるならば、遠眼鏡でその是非を確かめるような無風流はするまい。

(19) 目器益明勝薬針

眼鏡によって視力を増すことは、目薬や鍼灸で目を治療するのに優っている。

(20) 読書貧楽価千金

貧しくても読書を楽しむ心は値千金である。▼「未だ貧しくて楽しみ、富みて礼を好む者には若かざるなり」と(『論語』学而篇)。「春宵一刻値千金」(蘇軾「春夜」、正保四年和刻『東坡先生詩集』卷二二所収)。

(21) 百倍憂患灯火陰

(眼鏡を使わないと) 灯火の影のもと、読書での憂いは百倍になるだろう。

▼「人生、字を識るは憂患の始め」(蘇軾「石蒼舒醉墨堂」、正保四年和刻『東坡先生詩集』卷二八所収)。

(十二) 杖つえ

わづかに善あれば悪有、長きあれば短有、前あれば後したがひ、右あれば左まじはれるは、物毎の理なりけらし。此ものにつきても、

(1) 五十にして家につき、六十にして郷につき、七十にして国につき、八十にして朝につくは、寿といひ榮といひ、めでたき事のかぎりなれど、

(2) 若くてつく人は、病るか不礼か(3) 獺漁の爲にして、みなよからざるわざにこそ。うつ杖にも、(4) 親師の諫めの杖は後ぐすりなり

けれど、(5) 囚のうたる、は始もわるし後もいたし。このふたつをわきまへざらんや。されども其よき事のみ己に帰すべきにもあらず。い

たりていはゞ、さかふるも時、(6) をとらふるも時なるべし。そもまた、

(7) せまりてちかづくとはあらざるべし。(8) 世を苦竹の杖よ、国につくべき榮もまたず、人をうつべき禁もなし。雨ふりに道あしければつ

く、晴ればつかず。病をこればつく、いゆればつかず。つかまくおもへばつく、いな、ればつかず。人の杖にあらず、みなわが杖なり。

(9) つら杖もまたしかなり。

(10) ほうづえもかたぶく月の詠哉

① 病身捨世始無憂

何本截成何本失

儀礼不修杖二郡州

一林瘦竹吾菟裘

【語釈】

(1) 五十にして家につき、八十にして朝につく

「五十は家に杖つき、六十は郷に杖つき、七十は国に杖つき、八十は朝に杖つき、九十の者は天子問ふこと有らんと欲すれば、則ち其の室に就き、珍を

以て従ふ」(『礼記』内則第十二)。

(2) 若くてつく人は、病るか不礼か

若者で杖をつく人は病人か、無礼ものか。▼「若人たちが取て、炎天の道のよきにも杖をつき給ふ事、誠に人の非問(傍注「そしりカ」)、世のをき(傍注「もカ」)てをものはからざる振舞、云にたえたり(早稲田大学本『慶長見聞集』巻六「江戸にて老若杖突事」)。

(3) 狐漁の為に

「狐漁(カリスナドリ)」(『書言字考節用集』)。鷹狩りで鳥を駆り立てるのに使う狩杖や、長柄の先端に尖った金属を付けて魚類を獲る簞などのことか。

(4) 親師の諫めの杖は後ぐすりなりけれど

親や師が諫めのために使う杖は、後のための葉となるけれど。▼「鉄砲もやめん後世こそちぐすり」(『新続犬筑波集』巻一〇)。

(5) 囚のうたるゝは始もわるし後もいたし

囚人が打たれる杖は、打たれることになった原因も悪いし、打たれた後も痛い。▼答杖で打たれることをいう。

(6) をとらふる

一見「を(お)とらふ」の誤りかと思われるが、動詞「おとる」の未然形「おとら」に継続の助動詞「ふ」が付き、転じて「おとらふ」となったという説がある(小学館『古語大辞典』)。これに従えば誤りとは言えない。

(7) せまりてちかづくとはあらざるべし

(身の栄えや衰えが)差し迫って近づいていくわけではない。

(8) 世を苦竹の杖よ

世を捨てた私の苦竹でできた杖よ。▼「世を逃(にぐ)」と「苦(にが)竹」の掛詞。「苦竹 国俗、呉竹ト云。又、真竹ト云。筍ノ味微苦シ。ハチクニヲトレリ」(『大和本草』巻九)。

(9) つら杖

「つらつえ ほう杖也」(慶長二年跋刊『匠材集』)。

(10) ほうづえもかたぶく月の詠め哉

月の顔を支える頬杖でもあればよいのに。傾く月を、もつと眺めていたいなあ。▼「かたぶくにほうづえもがな月の顔」(『山之井』秋部「月」、常倫)。

(11) 病身捨世始無憂、儀礼不修杖郡州

私は病身のため世を逃れ、初めて憂いというものから解放された。儀礼では杖を使える年齢と範囲に決まりがあるが、私は上の如くそこから免除されているので、どこへでも杖を突くことができる。

(12) 一林瘦竹吾菟裘

蘇東坡は「一群れの瘦せた竹林が、私の隠棲の場所だ」と詠んだが、それはまさしく杖にすがって生きる私の身の上であるよ。▼「城中の古沼、坤軸を浸す。一林の瘦竹、吾が菟裘」(蘇東坡「木山、并びに序」、正保四年和刻『東坡先生詩集』巻三〇所収)に拠る。

(十三) 一 半弓

射る事は②六芸の一つに出て武將これを重す。(③仁平の頼政は雲中の妖獣をゐて宸襟をやすめ、④元弘の広有は殿上の怪鳥をゐて叡覧に達し、⑤与一宗隆は船中の扇をつらぬいて源平の目を驚し、⑥孫四郎重氏は洲崎の鴈にあって、兩陣の気を散ぜり。猶人間のことわざのみにあらず。(⑦月に弓張あれば、⑧仏に愛染あり。(⑨虫に射工あれば、⑩魚に矢柄有。我半弓は彼⑪詐巫のあづさの人を欺き、⑫鼠取の弓の物をたはかる類ひにはあらず。⑬射有レ似二乎君子⑭失二諸正鵠⑮反求三諸其身⑯」といへり。(⑰若丸ながらもこの事をらば、我身におはぬもはづかしきに、半まなぶぞ似つかはしき。

(15) 半弓かみじか夜にゐる月の影

(16) 聞説半弓目中濃
キクナラクハンキウメアテコマヤカナリ

(18) 手前縦横十文字
テマハタテヨコモウジ

(17) 狩場獲物不當窮
カリバノエモノズベカラキハム
(19) 詭遇不差伐善工
キクウスハチホルゼンコウト



卷三挿絵(4): 弓にて狩獵をするさま。

【語釈】

(1) 半弓

「半弓(ハンキウ) 本名ハ站」(『書言字考節用集』)。「本朝ノ制ニ準フレバ、タゞ其ノ長ノ短カケレバ、我國ノ弓ノ半也トイヘル儀ニゾアタルベキ」(『本朝軍器考』卷四上)。

(2) 六芸

「周礼ノ註ニ、礼・樂・射・御・書・數、之ヲ六芸ト謂」(『増補鉄槌』第一

二段注)。

(3) 仁平の頼政

仁平の頃の源頼政。▼「仁平のころはひ、主上よなくおびえたまざらせ給ふ事ありけり。……(頼政は)矢とつてつがひ、南無八幡大菩薩と心のうちに祈念して、よつぴいてひやうと射る。手ごたへしてはたとあたる」(『平家物語』卷四「鵠」)。

(4) 元弘の広有

元弘の頃の隠岐広有。▼「其(元弘三年)秋の比より紫宸殿の上に怪鳥出来て……(広有は)弦音高く兵と放つ。鎗、紫宸殿の上を鳴り響き、雲の間に手答して、何とは知らず、大盤石の落ち懸かるが如く聞へて、仁寿殿の軒の上より、ふたへに竹台の前へぞ落ちたりける」(『太平記』卷一二「広有怪鳥を射る事」)。

(5) 与一宗隆

那須与一宗隆。「射つべき仁はみかたに誰かあると宣へば、上手どもいくらも候なかに、下野国的那須太郎姿高が子に与一宗高こそ、小兵で候へども手さきで候へ」(『平家物語』卷一一「那須与一」)。

(6) 孫四郎重氏

本間孫四郎重氏。資氏とも。▼「本間孫四郎重氏……遙に高飛挙りたる鵜、浪の上に落さがりて、二尺計なる魚を、主人のひれを斷で澳の方へ飛行ける処を、本間小松原の中より馬を懸出し、追様に成て、かけ鳥にぞ射たりける」(『太平記』卷一六「本間孫四郎遠矢の事」)。

(7) 月に弓張あれば

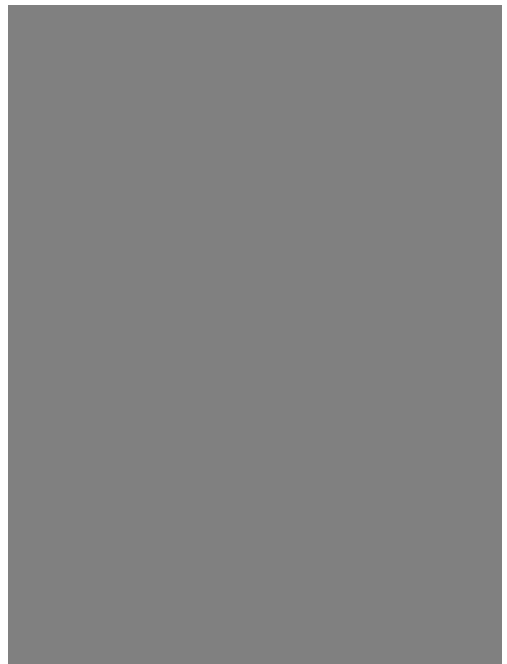
「弓張」は上弦、または下弦の月。「弦月……和名由美八利、有上弦下弦」(『和名類聚抄』)。

(8) 仏に愛染あり

「愛染」は「愛染明王」の略。真言密教で信仰する明王の一つ。六臂に金剛鈴と五鈷杵・蓮花・定弓・慧矢などを把る。図版参照。

(9) 虫に射工あれば

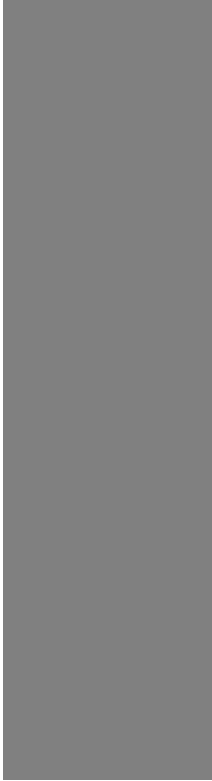
「江南山谿の中の水の射工虫は甲の類なり。長こと一二寸、口中に弩形有り、気人影を射る」(『博物志』卷三「異虫」、延宝五年和刻本)。『和漢三才図会』卷五四では「蜮(いさごむし)」として立項される。図版参照。



『仏像図彙』卷二(『訓蒙図彙集成』第一四卷)より

(10) 魚に矢柄有

「矢柄」は、鯀魚のこと。「鯀魚(やがら)……案ずるに、鯀魚、形鱗(かみ)に類して長円く、箭鯀(か)の如し。故に俗に呼んで鯀魚と名く。喙長く、上下均し」(『和漢三才図会』卷四九)。図版参照。



『和漢三才図会』(東京美術)より

(11) 詐巫のあつさの人を欺き

「詐巫」は偽りの巫女。ここでは梓弓の弦を叩いて死者の霊を呼び寄せる口寄せ巫女のこと。「あづさ」は梓弓。中山太郎『日本巫女史』三九〇～三九三頁参照。

(12) 鼠取の弓

「桐斗(ねずみをどし)……桐斗は唐韻云、鼠を射るべき也。鼠弩は即ち鼠弓也。△按ずるに桐斗は箱の中に餌を撒き、鼠入れば則ち機旋りて之を射る。今の制、弓を用いずして容易也」(『和漢三才図会』卷二二)。図版参照。但し図版は「今の制」にかかるものか。



(同前)

(13) 射有似乎君子、失諸正鵠反求諸其身

「子曰く、射ることは君子に似れること有り。諸正鵠を失して、諸反りて其の身を求む」(『中庸』第一章、訓読は寛文四年和刻本『四書集注』に拠る)。「似」を「のれること」と訓読するのは当時の慣例。

(14) 若丸ながらもこの事にをらばく半まなぶぞ似つかはしき

もし完全にこの教えを守ろうとするならば、自分の身に顧みないのは恥ずかしいけれども、(自分の弓は半弓であるだけに)半分学ぶくらいが似つか

わしい。

(15) 半弓かみじか夜にゐる月の影

短か夜を照らす月影は、(短いだけに) 半弓の形をした月から射られたものであろうか。

(16) 聞説半弓目中濃

聞くところによれば、半弓で射ることが出来る対象は小さいものだそうだ、の意か。▼「濃(コマヤカ)」「書言字考節用集」。

(17) 狩場獲物不当窮

狩場の獲物を追いつめることはできない。

(18) 手前縦横十文字

私の弓の技術といたたら、手当たり次第に射ることだ。▼「手前」は腕前。「弓―手前」「類船集」。「縦横十文字」は、前後左右に動き回るさま。「タテ、ヨコ、ジユウモンジニ、テキヲ、カケ、ヤブル」(縦横十文字に敵を駆け破る)。「邦訳日葡辞書」。

(19) 詭遇不差伐善工

詭遇と言われようが恥じることはない。道具の性能の良さを誇ろう。▼「詭遇」は正しい方法によらずに獲物を得ること。御者の名人王良が、弓術の下手な嬖奚のために、わざと馬車を無法に操った故事による(『孟子』滕文公下)。「伐(異本/ホコル)」(五山版『法華経音訓』)。

(十四) (1) 鼠突

武を以て世を治め、兵を以て人をつみせるは、ものゝふの道なり。武士ならぬ人はたま／＼うらむべき事あれども、②検非違使にうつたへ政所に申て、その仇を報て、みづから兵を用ゆる事なきは、これ天が下の大法なり。かくてぞ③武家ならぬ人のもてるすやりを鼠つきといへり。(4)とは何事ぞ。(5)鼠は賊の異名なり。武家ならずといへど、

夜中に盗賊襲来りて我を害せば、いかんぞすみやかに仇をむくひざらん。これ我すやりを求めし所なり。かく有しかど、今はたゞ⑥たけき心もすて舟の、塵もほこりもはらはねば、身は⑦あかいはしのしほぐちて、うらさびしくもかたすみ、⑧香車のごとくたて、おくのみ。猶⑨花ぬすむものこそつらくけれ。

(10) 花の香を賊風にやりもがな

⑪無用為レ用人目畏

⑫不レ磨不レ琢竟ニ天年

⑬雖ニ非類ニ識ニ吾心一否

老鼠翔行鼠突辺

【語釈】

(1) 鼠突

武家ではない者が使う素槍(後文、および注3参照)。▼『日本国語大辞典(第二版)』によれば、「槍術の未熟な者をあざけていう語」とし、「彦九郎あざ笑ひ、なんのおのが鼠突。鼓の胴こそ握るとも、鎧の柄握る習は知らじ」(堀川波鼓『巻下』)の用例を挙げる。しかしこの『宝蔵』の用例を加えるならば、素人が使う素槍をもともと「鼠突」と呼んでおり、そこから転じて右のようなあざけりの言葉が生まれたものと考えられる。

(2) 検非違使にうつたへ政所に申て

「検非違使」は、平安〜室町時代にかけて、京都の治安警護のために置かれた職。「政所」は公事訴訟を取りさばく役所。

(3) 武家ならぬ人のもてるすやりを鼠つきといへり

「すやり(素槍)」は穂先がまつすぐの槍。「鎧」やり。今按俗云、すやり。槍同「訓蒙図彙」巻九。ただし『和漢三才図会』によれば、「凡そ槍は今の武士の外、之を持しむることを許さず。武家と雖も、祿二百斛以上及び諸役人の外之を禁ず」(巻二「鎧」とある。

(4) とは何事ぞ

それはどういうわけか。▼「白うるりといふ名をつけたりけり。とは何者ぞと、人の問ひければ」〔徒然草〕第六〇段の呼吸。

(5) 鼠は賊の異名なり

「惟だ盗と黠と、是れ鼠の本性なり」〔本朝食鑑〕巻一一「鼠」。「盗人……賊（ヌスピト）」〔文明本節用集〕。

(6) たけき心もすて舟の、塵もほこりもはらはねば

勇猛な心も、乗り捨ての舟のように捨ててしまい、塵も埃も払っていないので。▼「ステブネ（捨舟）すでに浜に引きあげられてあつて、全く役に立たない舟」〔邦訳日葡辞書〕。「はらふ（払ふ）」は檣の縁語。

(7) あかいはしのしほぐちて

赤鯛が塩に漬かったように、檣の鋒が赤く錆びてしまつて。▼「あかいわし（赤鯛）」は、塩漬けの赤みがかつたイワシ。また、赤くさびた鈍刀にもたとえられる。

(8) 香車のごとくたてゝおくのみ

香車の駒を差すように、檣を垂直に立てておくだけである。▼「香車」は将棋の駒の一つで、直進するのみ。「香車は、一筋にむかふへ行がゆへに、異号を鍵といへば、是になぞらへて、遣手を香車といひ来れり」〔色道大鏡〕巻一。なお将棋の駒の配置を「駒立て」という。よつて「たつ（立つ）」は、将棋の駒を定める意と、檣を立てる意がかかる。

(9) 花ぬすむものこそつらくけれ

檣に関する故事などあるか未詳。あるいは「盗人」の文脈を受けつつ、後続の発句を導くために用意しただけの文か。

(10) 花の香を賊風にやりもがな

花の香を盗む風に、檣をひと突きお見舞いしたいものだ。▼「国に賊のたぐひか花の春の風」〔続山之井〕春の発句中、如水、「花の香をぬすみて走風かな」〔犬子集〕第三春下、詠者未詳。

(11) 無用為用人目畏

人目を嚇かすこの檣は、莊子のいわゆる「無用の用」（一見無用のようだが、長い目で見れば有用であること）を為している。▼「恵子、莊子に謂ひて曰く、子の言、用無し、と。……莊子曰く、然らば則ち無用の用たるや亦明かなり、と」〔莊子〕外物篇。

(12) 不磨不琢竟天年

磨かれることも研がれることもなく、自然のままにその寿命を全うしている。▼「莊子、山中に行き、大木の枝葉盛茂せるを見る。……莊子曰く、此の木、不材を以て其の天年を終ふるを得たり、と」〔莊子〕山木篇。

(13) 雖非類識吾心否

お前は私と同類ではないけれども、（そういう生き方を好む）私の心を知っているのか。▼「非類」は類を同じくしないこと。「神は非類を欲けず、民は非族を祀らず」〔春秋左氏伝〕僖公、十年秋。

(十五) (一) 三味線

にくや此もの、(2) 今こそはあれ我も昔は男にて、(3) 鹿をどりの頭ふらめき、(4) 妻引糸をしらべ、(5) くすしもしらぬわづらひには、(6) らうさいの「ふしをくすりとき、なし、手なれしか共、(7) 鄭声をさけよといへる誠を(8) 籠耳にとめてより、打すてはふらかし、年にまれなるす、はきならでは、よそめにも見ざりつるを、此比またわるさする子の取出でかなぐり引ぞまぎらはしき。されどもまた(9) 諸法実相と聞時は、何をか嫌、何をかにくまん。(10) 極楽の物のねも此三味線も、へだてはあらじ。さりとて(11) 昔にかへらうびにはあらねども、(12) 歌念仏もひやうしとれ。(13) 題目をどりのものせよ。

(14) 花にうたへ引ひかなせん海老尾かいろうび

(15) 少年一曲似ニ春鶯シヤウネン キョクニタリ シュンワウニ

(16) 掩抑三絃恋慕声エンヨク スエンレンボノコエ

(17) 誰識昔吾浮藏主タレカシラ ムカシワレモウサウス

(18) 当時惡レ聴レ戻ニ衆情トウジ ニク テキコトヨモラントハシユノコロニ

【語釈】

(1) 三味線

三味線の起源は、文禄の頃、石村検校という者が琉球に渡ったときに見た、三弦を張り弓で弾く琵琶に似た楽器に想を得、帰国後に三味線として考案したという（寛文四年刊『糸竹初心集』巻下）。

(2) 今こそはあれ我も昔は男にて

今はそうではないが、私にも昔は男盛りの時があつて。▼「今こそあれ我も昔はおとこ山さか行時もありこしものを」（『古今集』雑歌上、読み人知らず）。

(3) 鹿をどりの頭ふらめき

「鹿踊り」を歌って頭をふらつかせ。▼「鹿踊り」は俗語。「獅子踊（鹿踊）の歌詞は、『裏の関の清水は夜毎に落つれど名も立たぬ、ゑいそりや夜毎に落つれど名も立たぬ』（藤井乙男校注、評釈江戸文学叢書『西鶴名作集』一六七頁）。

(4) 妻引糸をしらべ

女性を誘惑する曲調を三味線で奏でて、の意か。▼「妻引さいひ」に「妻惹く」と「爪弾く」を掛けたか。『好色一代男』巻七―一に、鹿踊りに合わせて三味線を引く場面あり。

(5) くすもしらぬわづらひ

医者も治療できぬ煩い。すなわち恋煩い。

(6) らうさいの一ふし

弄斎節の一節。▼弄斎節は江戸前期に遊里で流行した俗謡。「抑傾城の歌は、らうさい・片撥を最上とす」（『色道大鏡』巻八）。また、ここでは前文から

のつながりで、恋煩いによる気鬱症を表す「癆瘵らうさい」も掛かる。「一、癆瘵らうさい 恋なり」（『はなひ草』）。

(7) 鄭声をさけよといへる誠

鄭声を避けよといった孔子の訓戒。▼「子曰く、紫の朱を奪ふを惡む。鄭声の雅楽を乱るを惡む。利口の邦家を覆す者を惡む」（『論語』陽貨）。「鄭声」は、鄭国で行われていた淫猥な俗曲。

(8) 籠耳

籠のように漏れてしまう粗忽な耳。▼「別て左耳に聞て水もたまらず、右耳に泄る籠耳こそ疎おほゆれ」（貞享四年刊『籠耳』序）。

(9) 諸法実相

「諸法実相」は仏語で、一説に、空・有を超えた絶対肯定の理。「楊梅桃李数々の、色香に染める心まで、諸法実相、隔てもなし」（謡曲『芭蕉』）。後文の「へだてはあらじ」に掛かる。「へだてなき―諸法実相」（『類船集』）。

(10) 極楽の物のねも此三味線も、へだてはあらじ

極楽に流れるという音楽も、この三味線の音も、隔てはないだろう。▼「極楽は風の吹音も楽の声を聞がごとし」（『類船集』巻四「音楽」）。

(11) 昔にかへらうびにはあらねども

昔に帰ろうというわけではないけれども。

▼「かいらうび」は、「昔に」帰ろう」と、「海老尾」が掛かる。「海老尾」は、

三味線の棹の端、海老の尾のように反り返った部分。図版参照。

(12) 歌念仏

門付け芸の一つ。▼「沙門の説経をやつして、下僧のかたるを歌念仏といへり。たとひふしを付るとも、仏教のみをかたらばさもありなん、小栗・山椒大夫などいふものに、鉦鼓の拍子をとりにかたる事、是にかにぞや。歌念仏の名目にはたがへり」（『色道大鏡』巻八）。



元禄十二年刊『大幣』
卷六（『日本歌謡集成』
所収）より

著作權保護のため図は非表示

(13) 題目をどり

「此所に題目踊あり。七月十六日の夜、男女老若一在所のこらず、題目にふしをつけて踊。其有さま稲のはへ出てよりみのるかたちとやらん。はじめは立てめぐり、後にうつぶして、稲のみのりてふしたる体に踊なり」(『京童跡追』巻二「妙泉寺」。図版参照。



『新修京都叢書』巻一より

(14) 花にうたへ引さかなせん海老尾

花を見て歌え。私が海老尾の引肴を添えましようぞ。▼「引さかな(引肴)」は、膳部に添える肴。「海老尾」は注11参照。三味線の伴奏を添えるの意。

(15) 少年一曲似春鶯

年若い男子の歌う一曲は、まるで春鶯の囀りのよう。

(16) 掩抑三弦恋慕声

三味線の恋慕の調子は淫猥だとして押さえ込んだ。▼「第五の絃の声は尤も掩抑す。……掩抑トハ、オホハレ、ヲサヘラレタルナリ」(『和漢朗詠集註』巻五「管絃」)。

(17) 誰識昔吾浮蔵主

むかし私が浮かれ坊主であったことを誰が知っていようか。▼「禪寺の花に心や浮蔵主」(『毛吹草』巻一「ざれ句」)。

(18) 当時悪聴戻衆情

今は聴くことを憎んで、大衆の心に背いているけれど。▼「終(モトル)戻(同)」(『書言字考節用集』)。